

吾輩はブツタである

大口 怜 奈

吾輩はチベツトスナギツネである。名前はブツタ。

どこで生まれたかはとんと見当がつかぬ。何でも天井に大きな四角形の穴が開いた壁の中でただ静かに横たわっていた事だけは記憶している。

吾輩はここで初めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれはあの時の吾輩と同じ「子供」というものであったそうだ。

この子供というのは時々我々の様な者を追いかけて弄ぶという話である。しかしその当時は何という考えもなかったから特に恐ろしいとも思わなかった。ただ三人組の内一人に持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。この時少し落ちついて目の前の子供の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。

この時妙なものだと思つた感じが今で

も残っている。目の前の子供の横にいた子供の目の色は左右対称であつたが、目の前の子供の目の色は左右非対称だつたのだ。その後たぐさんの人間にもあつたが彼の様な目の者には一度も出会つた事がない。その後はとくに何があつたかは覚えていない。なにせその時は眠たくて眠たくて仕方がなかつたのだ。ただ覚えていのは、久しぶりに感じた生きたものの、気持ちの良い温もりだけ。

今現在、吾輩はネイと呼ばれる人間の女子に世話をしてもらつている。彼女も中々妙な姿で、吾輩が見かける人間の毛というのは落ちついた色のものばかりだが、ネイの場合明るい緑をしていた。だがそのおかげでどれがネイなのか判別がしやすい。ああそうそう、吾輩の幼少時に出会つたあの子供達は今も時折、会いに来てくれる。正直いって、嫌な気持ち

くれたり、なにやら面白い形をした「果物」とやらをくれたりするからだ。スイカなんて吾輩の大好物だ。

ただ、目の色が非対称の彼、「猫の目」というのか。は、他の人間と違つて意味のわからない事をしてくる。吾輩の顔を見る度、不細工だの、大仏のようだのと言つてくる。彼の言つてくる言葉一つ一つの意味はわからぬが、吾輩を罵つていられるのはわかる。しかしなぜそのような事をしてくるのか。吾輩はとくに彼に恨まれるような事はしてないつもりだ。だいたい、彼はあのような美しい目を持つているのだから、それに恥じぬよう行動してもらいたいものだ。だが、彼のバカな行動にも理由があるという事を吾輩も知らないわけではない。

最近、吾輩にも新たな友人ができた。名は「ビル」という。名前の由来はあるおとぎ話にでてくる、おばかなトカゲのビルとの事らしい。確かに彼はトカゲだが、おばかだとは到底思えない。ビルは吾輩の知らない事をいくつも知つている。吾輩の身近にいる人間達の事、果物の種類、外の世界の事など、様々だ。ビルに

よると、自分でも知っているだけで意味はわからないものもあるんだとか。その時は吾輩も彼といっしょに悩み、考え、答えを導きだすのだ。その時間が吾輩にとつて何よりも楽しい時間だった。

ある日、吾輩は彼に相談をした。なぜ猫の目の少年は、吾輩をバカにするのだろうか。もし何か彼に対して無礼を働いたのであればお詫びがしたい、と。小さき友は言った。「キミがあやまるひつようはないよ。あの子はただ、キミにやつあたりをしてるだけなんだ」彼に何か辛い事でもあったのか。「そうだね。なにせ親友がいなくなつてしまつたんだもの。ムリもないよ」あの二人が？しかし、一昨日は二人とも家に遊びに来ていたはずだが。「フレディくんとポビーのこと？あの子たちじゃないよ。そもそも人間ですらなかつたけど、それでもあの子にとつてはだいたいなそんざいだつたんだとおもう」それはつまり、吾輩や君のような動物だったのか？「うん。どっちかというとかボクみたいなトカゲかな。ちいさくて、ムラサキいろで、しましまな。なんだかあらためてかんがえてみると、ボクって

チェシヤねこにてるとおもふんだよね」ちえしやねことは何だ？「ふしぎのくにのアリスにと同じようするねこだよ。ボクみたいにムラサキいろでしましまなんだ。またこんやいっしょにえいがみようよ。ネイさんにたのんでさ」それはいい考えだ。ぜひともそうしたい。「じゃあきまりだね！…ボクたちなのはなししてたつけ」…さあ。吾輩も忘れてしまつた。「そっか」

忘れてしまつたというのは嘘だ。吾輩にはなんとなく、猫の目の彼がああする理由が見えた気がした。ビルが言った「親友」というのは、おそらく君自身なのだろう。前々から疑問に思つていた事があつた。彼はなぜあんなにも人間達の間、外の世界のものに詳しかったのか。それはきつと、あの少年から教わり、少年とともに見聞きしてきたからなのである。そうだったら納得がいく。だがなぜあの少年の目にビルの姿が映らないのだろう。ビルは吾輩のそばから片時も離れた事がない。だからこの家に来た時、必ずビルを見かけるはずだ。盲目でない限りは。それかもしくは、少年の目には

消えてしまつたように見えて、実はビルは透明になつてしまつただけなのかもしれない。透明人間ならぬ、透明トカゲに。吾輩は嗅覚に優れているからこそ認識できてるが、人間の嗅覚もそうとは限らぬ。現に少年自身がビルを認識できていないのだから、実際優れていないのだろう。こうして答えに辿り着いてみると、あの少年が何とも不憫に思えてくる。たつた一匹の親友を失つたと思ひ込み、自ら孤独に陥つている。吾輩のあのダンボールの中をただ一匹横たわつていた幼少時の頃みたいだ。このままずっと彼が誤解し続けるのを見るのは吾輩も心苦しい。こはなんとしてでもビルの存在を証明し、長きにわたつた再会をさせてあげよう。親友がここにいると知つたらきつと、二匹とも大喜びするに違いない。よし決まりだ。さつそく取り掛かるとしよう。

こうして、吾輩は何とかビルの透明化を解こうと、あれこれ試行錯誤を重ねたが、結果はうまくいかず、それどころか吾輩の三時の楽しみであるオヤツのスイカを没収される始末だった。一体何がよくなかつたのだろうか、台所の上にあつ

た小麦粉の袋を持ち出して、ビルの上に振りかけた時か？はたまた散歩中に見つけた「神父」らしき人間を家に連れてお祈りか何かで解いてもらおうとした時か？もしかしたら…と、いくら思考を巡らせても、吾輩のスイカはしばらく戻ってこないであつた。それに落ち込んでいる吾輩を見かねたのか、ビルは吾輩を励ましてくれた。「ブツタ、スイカはないけどブドウひとつあげるよ」ん、それはありがたい。感謝する。「…ねえブツタ、わざわざボクのためにこんなことしなくたっていいんだよ。キミがおこられるだけだし、ボクにはキミがいるからなにもさみしくなんかないさ」いや、違うんだビル。確かに君やあの少年のためにやってあげたいと思う気持ちもある。だがあくまでこれは自己満足でやっているんだ。彼の吾輩に対するいやがらせさえやめてくれれば吾輩はそれで満足だからな。それに比べれば叱られるのも、オヤツを没収されるのも、どうってこともない。「それホンキョ？」ああ、本気だとも。「キミって、かおににあわずクールだね」吾輩はいつだつてクールさ。「なんだかこ

こらへんさむいね」そうか？「そうだよ」それじゃあ吾輩の毛を貸してやる。おいで。「…」どうした、来ないのか？「…」ボク、キミのそういうところもすきだよ？、ありがとう。「どういたしまして」そうさ、吾輩はただ、少年のいやがらせを止めさせて、皆でいつか楽しく遊べる日が来れば、それでよかつた。次の日以降、猫の目の少年は来なくなつた。少年が家に訪ねて来るのは、二週間、一度の頻度だつたが、一週間、三週間、一ヶ月待とうど現れなかつた。何かあつたのだろうか、心配するも、確かめる術がないため、ただひたすら待つ事しかできなかつた。半年経つたその日の昼頃、ネイ女史の様子が何やらおかしかつた。なぜか今日はいつものような明るい格好ではなく、珍しく黒く包まれていた。さらにあの見えていて安心するような優しい笑顔も消えていた。いつも笑顔を絶やさない彼女がどうして…何があつたのかと聞いてみるも、答えは得られなかつた。ここ最近はおかしな事はかりだ。突然少年は来なくなるし、吾輩の身近にいる

人間達はいつものような元気がないし、一番の驚きは今日のオヤツが赤いスイカではなく、黄色いスイカだつた事だ。世の中は吾輩が思っているよりも未知に溢れているのだな。そうだ、未知といえれば、ビルは突然こんな話を振りだした。「ねえブツタ、いきなりでわるいんだけどね」どうしたんだ、改まって。「…ボクはもう、しんでるんだとおもう」しんでる？「うん。よくよくかんがえてみたんだ。ボクがこのいえにくるまえのこと。それでおもいだしたんだ。ボクはいぬにたべられてしんだんだって。でもそれでようやくしつたんだ。あの子はキミが、ボクをたべたいぬにていたから愛することができなかつたんだって。でもホントウはだれもわるくなんてないんだ。ボクをたべたいぬも、ただおながすいてただけで、ボクもたまたまぬけだしてはちあわせちゃつただけ。しぜんのせつりつてヤツさ。いみはよくわからないけど…。あの子にもキミにも、わるいことしやつたなあ。あの子にさみしいおもいをさせて、キミのどりよくもみずのあわになつちやつた」…ビル「ん？」『しぬ』とは

何だ？「そうだね、あの子のもとへいくつてことかな。ボクもよくわかんないや」君は、あの少年の元へ行かないのか？「んー、まだ行かないでよく」なぜ？君も彼も会いたがってるんじゃないのか？「もしボクがいったら、キミがひとりぼっちになるでしょ？いくんだつたらキミといつしよにいくよ」そうか。では、どこへ行けばいい？なるべく早く彼を君に会わしてあげたい。「そんなにいそがなくたっていいよ。ゆつくりでいいんだ。なるべくゆつくり、たくさんのみやげばなしをつくつてから。じゃないとたいくつしちゃうでしょ」？、そういうものなのか。「そういうものだよ」なるほど。やはり君は物知りだな、ビル。吾輩の知らない事をよく知っている。「きいててあきないでしょ？ボクもさいしよはそうだったもん。そうだ、こんやいつしよにえいがでどう？あの子のすきだったシリーズがあつてね」ふむふむ「ラストのシーンがすごくかんどうてきで…」

所であつてほしい。でないと小さき友の言つた通り、退屈してしまう。退屈してしまつたらどうすればいいのだろう。永遠にそのままだつたらしんでしまいたくなるな。いや、しんでしまつたのにまたしにたくなるのはちと、おかしい話だ。このまま考えたつて仕方あるまい。答えは、その時になつたらわかるんだ。だつたら吾輩には、ただ待つ事しかできぬのだ。やがて、その時は来た。目を開けたら、辺り一面白だつた。吾輩は最初こそ困惑したがすぐに察した。ああ、吾輩はしんだのだなど。意外にも「し」というものは呆気なかつた。ただひたすら眠たくて眠たくて、起きた瞬間別の場所にいた。ただそれだけだつた。何だか昔にも似たような経験をした気がするが、なんだつたか：「ブツタ」む、その声は、ビルじゃないか。なぜ君も、ああ、いや、そういう、君といつしよに行くど昔約束したな。それでは、向かうとしようか。「あの子のいるばしよ、わかるの？」もちろんだ。吾輩のこの嗅覚をなめてもらつては困る。しつかり、あの少年の匂いを覚えてるんでね。「さつすが、ボクのあ

いぼう！たよりにしてるよ」スンスン、ん、いや、捜す必要はないらしい。あの先にいるようだ。「え？」

彼は目と鼻の先にいた。白くてボンヤリとしているが確かにそこにいた。試しに近寄つてみると、彼の匂いが強まつた。そのまま少し近づくと、さつきまで白い霧のようなボンヤリとしたものが晴れていき、やがて姿を現した。その後ろ姿は何も変わつていなかった。紛れもなく彼は、猫の目の少年、エヴァだつた。試しに彼の耳の後ろを舐めてみる。「うおわ!!？」うむ。この反応はやはり間違ひなくエヴァ少年だ。「ん!?おまつ何でここにつて、まあ言わなくてもわかるけど。君も死んだのかい、ん？」コクリと頷く。「そうかい。かわいいそうなこつた。にしても残念だ。ここに来ればビルに会えるかと思つたのに、まさかそのかわりに君に会うとは。つくづく運がない。ああ、君にビルの事を言つてもムダか。どうせ知らないだろうし」？少年が何をすつと語つてゐるのかはわからぬが、ほら、君の親友を連れて来たぞ。「何だよ、いちいち人の服をひつばるなよ。今景色を

見るのに忙しいのがわからなのか。あつち行け」まったく、何て頑固者なんだ。景色を見るのに忙しいとでも言うつもりか？ただ後ろを振り向くだけでいいんだ。頼むから。こつちを、見ろつて！「しつこいな！あつち行けて聞こえなかったのかよこのバカギツネ……」ふう、やれやれ、やつと頭上の彼に気付いたようだ。手間をかけさせやがって。「……何で、今になって現れるのさ。四年も経って、ここで十年間も待ち続けてたんだぞ、それなのにどうして来なかったのさ」……なぜ君は泣く。吾輩はてつきり喜ぶと思つて会わせたのに、一体どこで間違えてしまったのか見当がつかぬ。「バカだな。よく見ろよ」……なぜ泣いているのに笑顔なんだ？「うれし泣きつて聞いた事ある？今自分はずごくうれしんだよ。うれしすぎて泣いてるのさ」そういうものなのか？「そつちいうものなんだよ、人間つていうのは」……何だか妙なものなんだ人間というの。「ま、そうだろうね、君達にとつてはさ」エヴァ少年はそう言つて微笑み、吾輩を抱きしめた。「人間つて不思議だよ、キライなはずの君でも、こつ

したくなるもんなんだ」吾輩は彼の突然の行動に戸惑つたが、ビルがただ静かに少年の頭に寄り添う所を見て、まあいいかと思つた。何より、久しぶりに感じた生きたものの、気持ちの良い温もりがあった。嫌な気持ちがいなくなつた。むしろ、たまには悪くないかもと思う、吾輩なのであつた。